千葉東南部・千原台ニュータウン内出土の縄文時代石製玉類

小　林　清　隆

1．はじめに

千葉市の南西部から市原市の北西部の地域では、千葉東南部ニュータウンと千原台ニュータウンの造成に伴い、数多くの遺跡の発掘調査が実施されてきた。昭和47年度に開始された千葉東南部ニュータウン内の調査については、平成20年３月で終了となる予定で、また、千原台ニュータウンの造成に伴って調査された遺跡も、平成24年度までに完了すべく、整理作業を進めている。

この地域は、旧石器時代から奈良・平安時代さらに中世にわたる遺跡が密集して分布し、特に縄文時代に関しては、貝塚を伴う中期・後期～晩期の集落や、各時期の遺物包含層が、多数所在することで広く知られている。

縄文時代中期に限定しても、有吉北貝塚（小笠原西野 田島1998）や草刈貝塚（高田ほか1986）という大規模な環状集落や、それらと近接する鎌取遺跡（上守 西野1993）や草刈六之台遺跡（白井ほか1994）という、時期の重なる小規模集落の存在など、興味深い集落展開も認められる。

今回は様々な成果の中から、縄文時代の石製玉類について集成を行い、この地域における在り方を提示したい。そこで、最初に千葉東南部ニュータウン内の遺跡を取り上げ、次に千原台ニュータウン内の遺跡から出土した玉類を挙げていきたい。なお、集成図に用いた玉の図については、一部を除いて原寸を基本とした[註1]。

この集成が、今後の実施が期待される、総合的な当地域の検討に際し、その一助とでもなればと思う次第である。

2．千葉東南部ニュータウン内の遺跡

（1）バクチ穴遺跡

緑区おゆみ野南６丁目に所在する。村田川水系に関わる標高50mの台地上に立地している。北側には大膳野南貝塚が隣接し、谷を挟んで西側には太田法師遺跡が所在する。

遺構は早期の炉穴のほかに加曽利Ｅ式期後半の竪穴住居１軒、埋甕１基、堀之内式期の竪穴住居２軒、各時期の土坑や陥穴がある（郷田 大野ほか1983）。

包含層出土の土器は、撚糸文系土器群から後期の加曽利Ｂ式土器にわたり、前期の土器が目立っている。石製玉類は２点の玦状耳飾と、玦状耳飾の欠損品を垂飾に再製した１点の計３点が出土し、いずれも遺構から出土している。

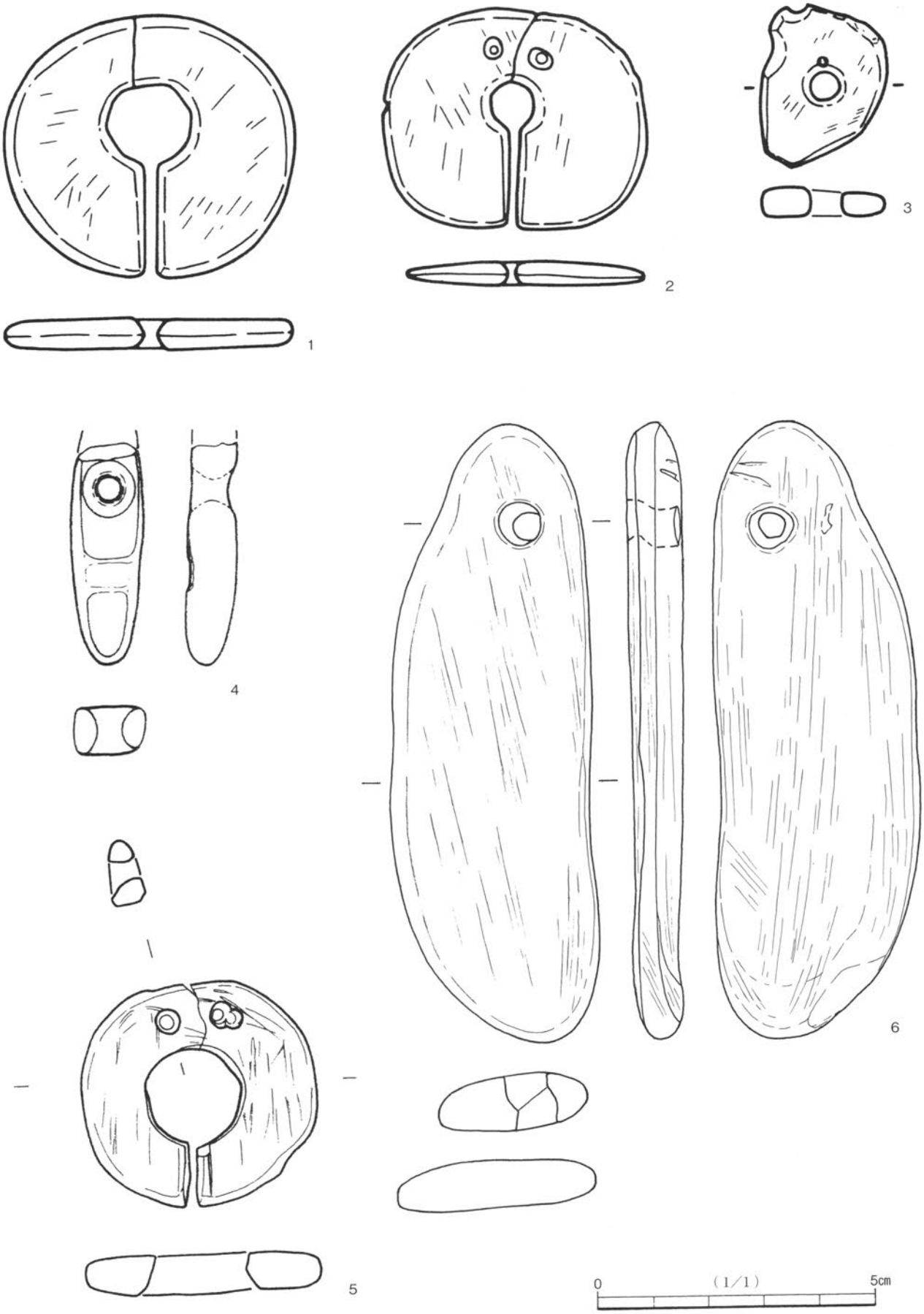
第１図－１・２は15号址という土坑からの出土である。この土坑は径50cmの円形を呈し、検出面からの深さは20cmにすぎない。出土位置は底面から浮いており、覆土中と考えられる。報告書では、土坑墓の可能性を指摘している。１は接合して完形となっている。補修孔が認められないことから、土坑に入った後に割れた可能性もある。入念な研磨が行われ光沢をもつ。滑石製である。２は補修孔が穿たれ、土坑に入る以前に割れていたことが確実である。１よりもやや小さいが、石材は滑石で断面形態などに共通する特徴が見られる。

第１図－３は土坑から出土している。土坑は33B号址で、開口部径が110cm、深さ55cmの規模を有し、底面から３cm浮いた位置から出土している。玦状耳飾の欠損品と見られ、その補修孔の一部と、垂飾に転用するために穿孔した２か所の孔の存在が確認できる。後者の穿孔は両側から行われている。入念な研磨が行われ光沢を帯びる。石材は滑石である。

この３点が出土した土坑の帰属時期は、土器が伴わないため断定はできないが、周辺の状況から推測すると前期である可能性が高い。

（2）鎌取遺跡

緑区おゆみ野２丁目・３丁目に所在する。標高40m前後の台地上に立地し、北側に鎌取場台遺跡、南側に有吉北貝塚が位置している。



第1図　東南部地区出土玉類（1）

調査は昭和58・60年に行われ、18200㎡について本調査を行っている（上守 西野1993）。縄文時代中期の集落は、台地の先端部の平坦な狭い範囲に集中して検出された。遺構の時期別の内容は、加曽利ＥⅡ式期が竪穴住居３軒と小竪穴２基、ＥⅢ式期が竪穴住居６軒となっている（西野2007）。

石製垂飾は、竪穴住居である007号跡から出土している。この住居は径4.8mの不整円形の平面形を呈し、５本か６本の主柱穴をもつ。遺物の主体は土器で、床面からやや浮いた位置から多量に出土しており、これらからＥⅢ式期であることが明らかである。ほかには軽石製品が出土している。

第１図－４の垂飾は住居の南側の壁に近い場所で、床面からやや浮いた位置から出土している。一端部を欠損しているが、中央に張りをもつ長楕円形の形態が復元される。中央をずらして両側から穿孔が行われ、孔端は丸味を帯びる。また、孔の下位の位置に浅い凹部を作出している。石材は滑石で、現状での長さは40.2㎜、幅12.7㎜、厚さ8.7㎜、重さは7.6ｇである。全体の形を復元して考えると、長さ５㎝を超していた可能性が高い。加曽利ＥⅢ式期の石製品と考えられる。

（３）太田法師遺跡

緑区おゆみ野南６丁目に所在する。村田川水系に関わる標高50mの台地上に立地している。

縄文時代の遺構は、早期条痕文系土器の時期と考えられる竪穴住居１軒、前期と見られる竪穴住居４軒のほか、炉穴17基、陥穴44基、土坑等が検出されている（森本2001）。土坑の中には諸磯式土器の浅鉢を出土する例もあり、包含層出土の土器も諸磯式を主体にしている。 石製玉類としては、包含層中から玦状耳飾１点が出土している。

第１図－５は滑石製の玦状耳飾である。色調は濃緑色から黒色に近い。切り込みの対向側で欠損し、補修孔と見られる小孔が左右に存在する。包含層出土にも拘わらず、欠損後散逸しないで出土したのは、補修孔が文字通り補修のために穿たれ、紐などで結合されていた結果であろう。

（４）有吉城跡

緑区おゆみ野有吉に所在する。標高42m前後の台地上に展開する城跡である。昭和57年度と昭和58年度に調査を実施した地点の調査報告書で、有孔石製品が１点報告されている（大野ほか1984）。さらに平成14年の報告書において２点の石製玉類が追加されている（加藤 西野 渡邉2002）。

第１図－６は長さ112.0㎜、幅37.4㎜、厚さ10.0㎜で、上端部寄りに両側から穿たれた孔が存在する。表裏は磨かれ、側面も面取りが行われたように研磨されている。孔の端部は鋭く、紐ずれや研磨の状況は認められない。石材は頁岩と見られる。具体的な出土状況は明らかでない。この調査では撚糸文系土器、条痕文系土器、前期～中期の土器片が僅かに出土している。縄文時代の石製品と確定できないが、状況から縄文時代の遺物と判断した。

第２図－１は平成14年に報告されている玦状耳飾の欠損品である。補修孔と思われる孔が２か所に穿たれている。この玦状耳飾が出土した地点の調査では、前期の花積下層式期と中期の加曽利ＥⅣ式期の竪穴住居がそれぞれ１軒検出されたほか、早期から後期にわたる土器片が出土している。

第２図－２も平成14年に報告されている。環状を呈するが、やや楕円形となる外形で、断面は浮き輪の様に丸味をもっている。周辺に研磨痕跡が残り、研磨方向の違いによって生じた稜が残存する。玦状耳飾の未成品ではなく、この形の製品と考えられる。石材は蛇紋岩である。周辺からは条痕文系土器が僅かに出土している。

（５）有吉北貝塚

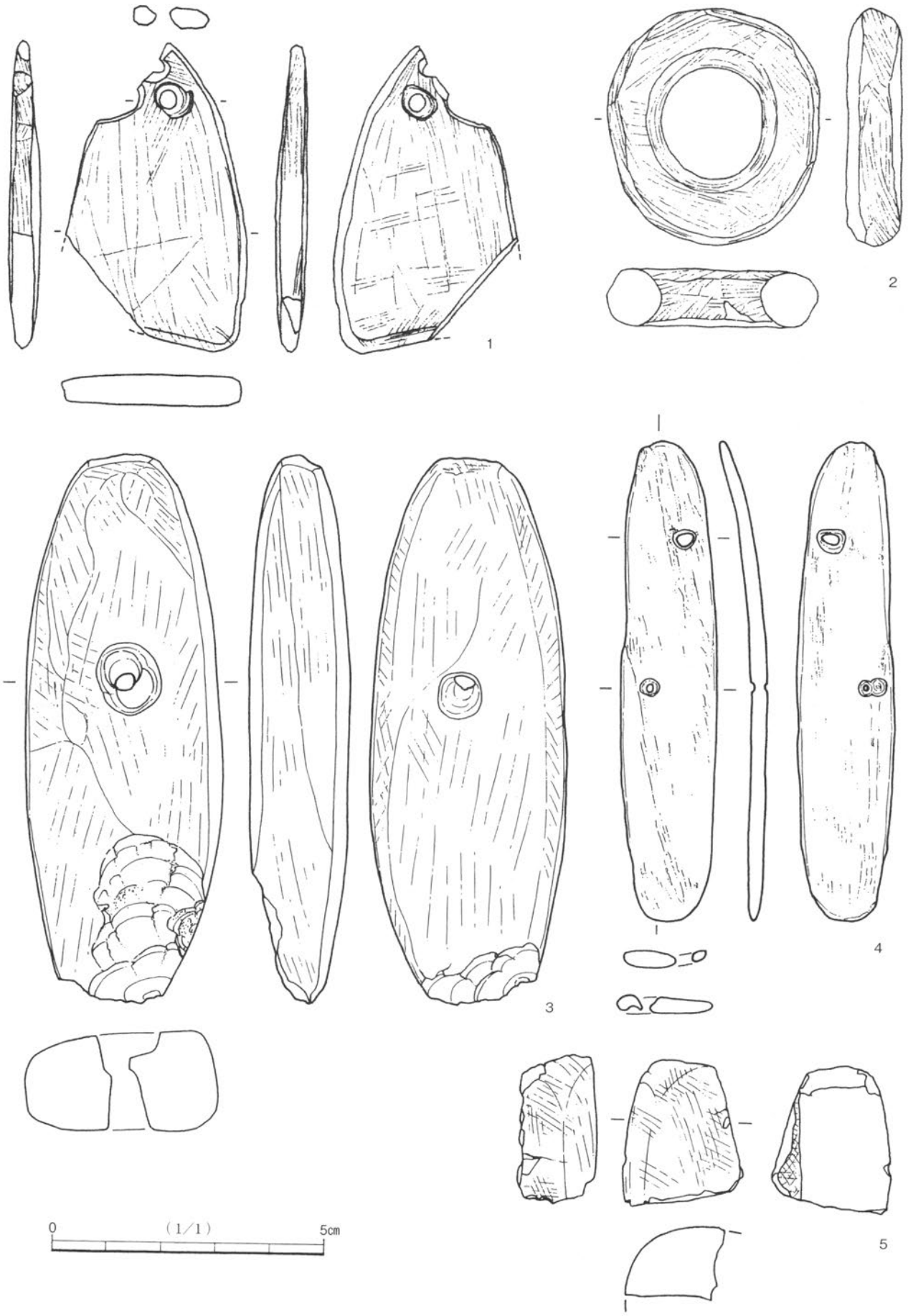
緑区おゆみ野２丁目に所在する。標高35m前後の舌状台地上に立地し、南側に近接して有吉南貝塚が存在する。

調査は昭和59年から昭和62年にかけて行われ、遺跡の大部分の範囲である29030㎡の本調査を実施している。

調査では縄文時代中期の竪穴住居134軒をはじめ、小竪穴などの土坑780基、大規模な斜面貝層３地点等と、膨大な量の遺物が検出された（小笠原 西野 田島1998）。

中期の遺構は広場を中心に環状に検出され、典型的な環状集落の景観を示している。集落の形成は阿玉台式期から開始され、加曽利ＥⅠ式期～加曽利ＥⅡ式期にかけて活況を呈し、加曽利ＥⅢ式期に入った頃に終焉を迎えている。貝層の形成も集落展開と同一経過をたどる。また、この環状集落が営まれた時期以外にも、早期の炉穴や前期の土器が多数検出されている。

調査によって出土した石製玉類の中で、報告書に実測図が提示された点数は11点である。ほかに琥珀製の玉と穿孔のある石製品１点、未成品か工具と考えられる棒状品１点などが掲載されている。実測図が示され



第２図　東南部地区出土玉類（2）

た玉類は、第２図－３～第３図－８である。

第２図－３は南側の斜面貝層から出土した大珠である。鰹節形を呈し、片方の端部を欠損し、現長は101㎜を測る。石材は石英で両側から穿孔が行われている。開口部が磨かれた様子は顕著ではない。南斜面貝層の形成が本格化するのは中峠式期以降と考えられるので、この大珠の帰属時期も中峠式期から加曽利Ｅ式期の間と推測される。

４は南斜面貝層から出土した厚さ7.0㎜のヘラ状垂飾である。全体に薄い板状に整形され、穿孔は上方と中央の２か所に存在する。ただ、中央では両側から穿孔を行っているが貫通していない。上方の貫通孔の周辺は磨かれた状態で、孔端部に丸味を帯びている。色調は透明感のある緑色である。翡翠製とされるが、石材については検討が必要かと思われる。

５は集落の南側のグリッドから出土し、遺構には伴っていない。欠損品である。表面は良好に研磨されているが、遺存部分に僅かに穿孔部が存在する。報告書では石材は滑石と記載されているが、翡翠と考えられ、熱を受けていると思われる。また、次に挙げる第３図－１と同一個体の可能性が高く、緒締形大珠の一部になるであろう。石材が翡翠で被熱が確かならば、上野修一氏のいう（上野2007）、硬玉製大珠の二次的変形－類型Ⅳ（被熱）－被熱度Level３程度の被熱になるのかもしれない[註２]。

第３図－１は加曽利ＥⅠ式期の竪穴住居であるＳＢ190から出土している。具体的な出土状態は不明である。部分的な遺存で全体の復元が難しいが、破断面に残された穿孔痕跡から推測すると、緒締形大珠であったと思われる。石材は翡翠で、熱を受けており、ヒビが入っている。

２は南斜面からの出土である。玦状耳飾の欠損品であろう。滑石製である。

３は玦状耳飾の垂飾転用品である。出土地点は不明である。本来は玦状耳飾として使用されていたと推測され、欠損後に孔を穿ったと見られる。この孔は玦状耳飾としての補修孔だった可能性もあるが、破断面に調整を施していることから、垂飾として用いられていたと考えられる。石材は滑石と見られる。

４は管玉状を呈する。形態は整った円筒形ではなく、断面形は楕円形を示す。縦方向の穿孔のほか、中央に側面から穿孔して縦孔に達する孔が存在する。石材は緑色凝灰岩である。また、出土地点については不明となっている。

５は４と同様な管玉状を呈する。欠損品で破断面の調整は行われていない。特徴として縦穿孔に対して横からの穿孔が２か所に存在する点が挙げられる。１か所は端部近くに穿たれ、両側から行われている。もう１か所は中央部に片側から縦穿孔部に達している。南斜面の肩部から出土している。石材は滑石である。

６は加曽利ＥⅠ式期の竪穴住居であるSB195から出土している。具体的な出土状態は不明である。形状はやや開いたＣの字形で、中央部に穿孔が存在する。玦状耳飾の欠損品に調整を施したとも見られるが、穿孔部位が中央を意識して行われていることから、本来の形状なのかもしれない。石材は滑石である。

７は玦状耳飾の欠損品である。破断面への調整は行われていない。南斜面からの出土である。石材は滑石である。

８も玦状耳飾の欠損品で、破断面への調整は認められない。南斜面の出土。石材は滑石と見られる。

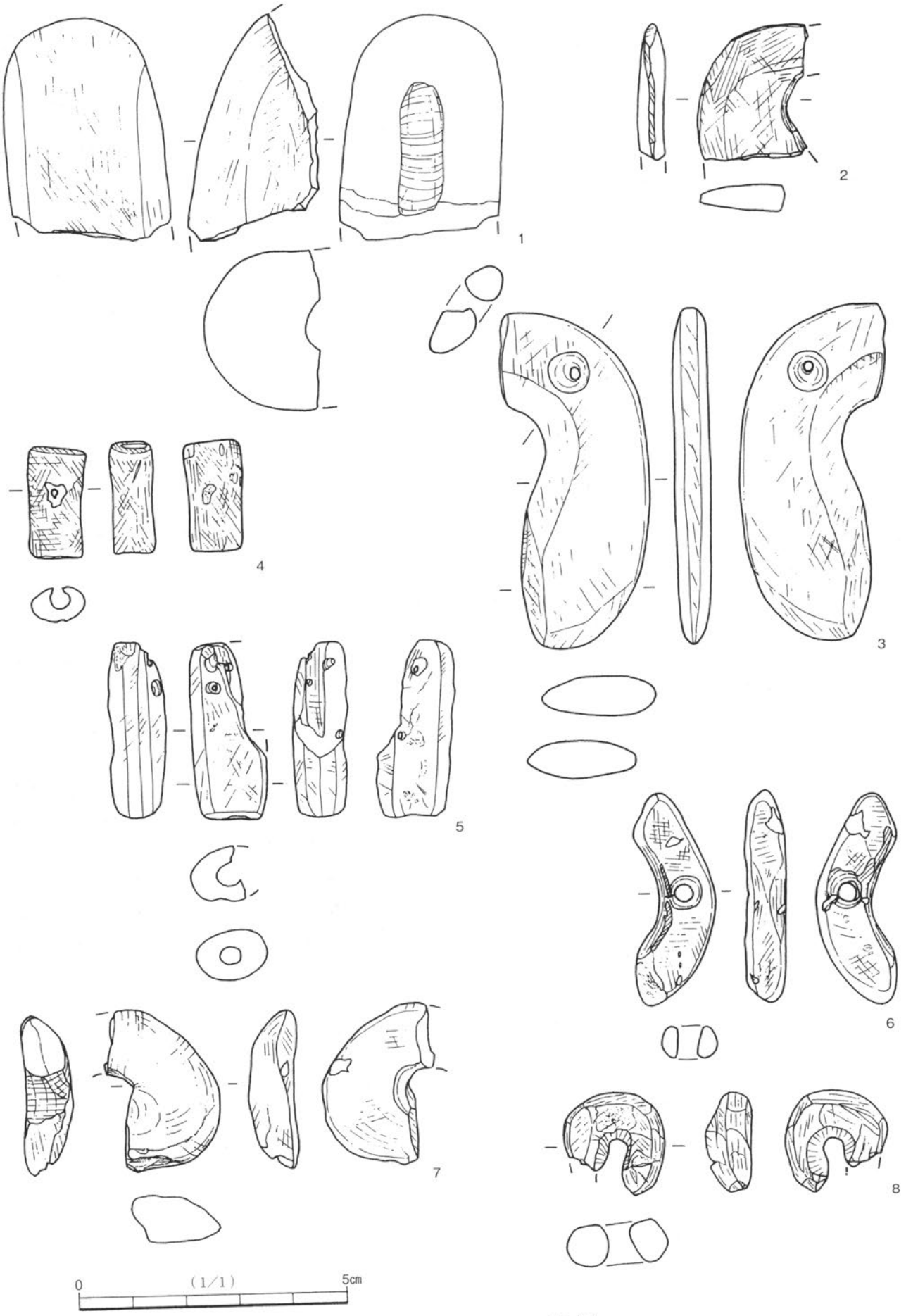
以上が実測図掲載の石製玉類である。ほかに報告書の第120表に属性のみ提示し、実測図を掲載していない垂飾５点が存在する。今回実測図を載せ、報告書を補っておくことにする。

第４図－１は中期の土坑から出土した滑石製の垂飾の一部分と考えられる。穿孔部は遺存していない。２も土坑からの出土である。上部と下部を欠損し、穿孔部の遺存は認められず、破断面への研磨も行われていない。粘板岩製である。３は北斜面から出土している。扁平な垂飾で穿孔部の一部が残存するので、上部の破片であることが明らかである。４は南斜面部から出土している。石材は翡翠と考えられ、被熱が認められる。翡翠と断定するにはやや問題を残すが、玉の一部であるならば大珠の中央部になるであろう。５は蛇紋岩製の垂飾の一部と考えられる。グリッドからの出土である。穿孔部は遺存せず、下部の部分と見られる。縦方向に割れ、破断面への研磨は行われていない。以上が追加資料である。

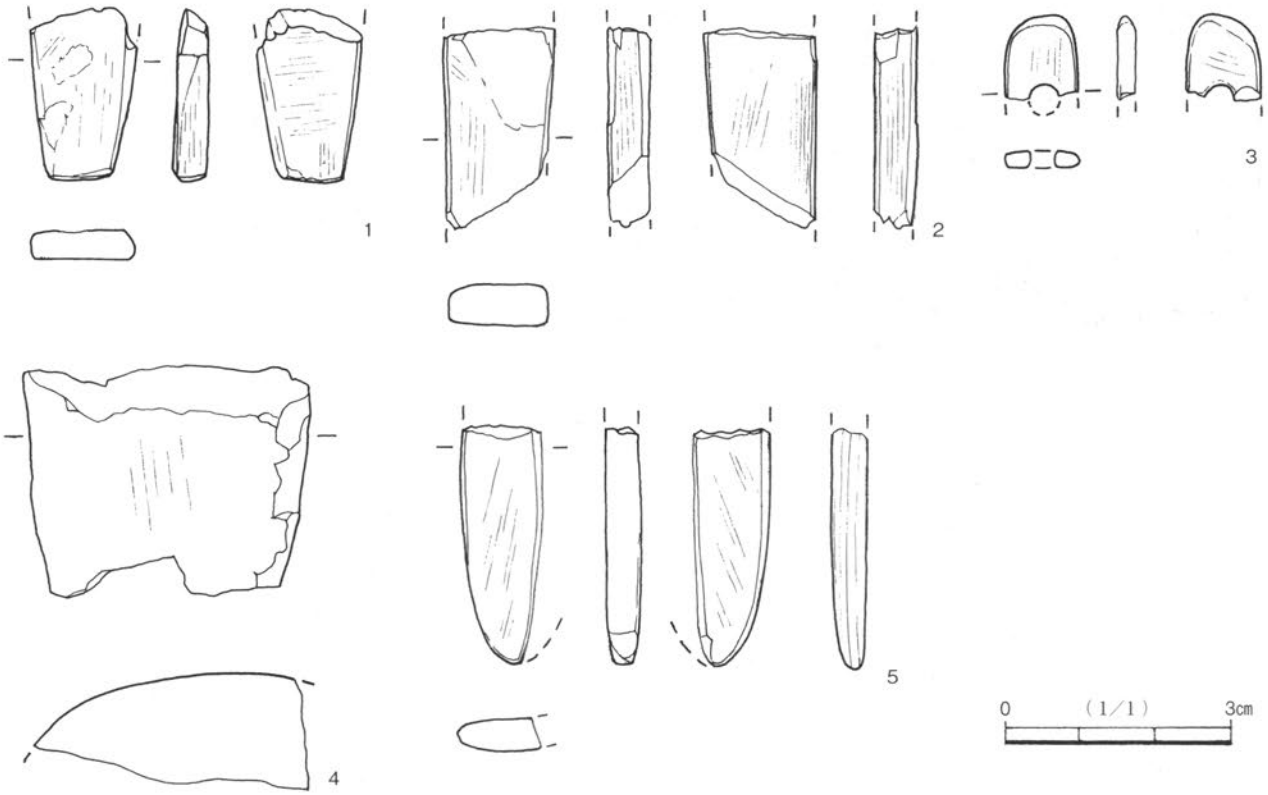
石製玉類のほかに、琥珀製の玉類も出土している。ここでは詳細にふれないが、琥珀玉は形状が様々で、小型品で占められている。また、報告書で図示した５点の内３点について土坑から出土している点が注目される。

（６）有吉南貝塚

緑区おゆみ野中央５丁目に所在する。有吉北貝塚の南側、標高40ｍの台地上に立地する。中期の環状貝塚が形成され、その外側縁辺部の調査が行われている。



第3図　東南部地区出土玉類（3）



第４図　東南部地区出土玉類（4）

すでに成果の一部については紹介されているが（四柳2000 安井 四柳2006 安井2006など）、報告書は平成20年３月の刊行予定である。したがって、石製玉類の観察だけ記載するにとどめたい。

玉類は２点出土している。１点は翡翠製の大珠であるが、これは破損して破片が遺存するにとどまる。片側の穿孔部が残存し、破断面には再調整が施されていない。残存部から復元すると、完形品は６㎝前後かそれ以上の長さがあったと思われ、透明感はないものの、白い部分に乳緑色が縞状に入った優品だったと想像される。破損後に破断面への磨きは行われていない。

もう１点は滑石製の垂飾で、丁寧に研磨が行われている。ただ、欠損していいるため全容は明らかでない。

（７）六通貝塚

緑区おゆみ野中央７丁目に所在する。村田川水系と都川水系に関わる谷の奥部で、分水嶺に当たる地域に立地している。考古学史的には古くから知られた著名な貝塚で、当財団による調査は、昭和59年度から平成９年度にかけて断続的に行われた。この報告書は平成19年に刊行されている（西野2007）。

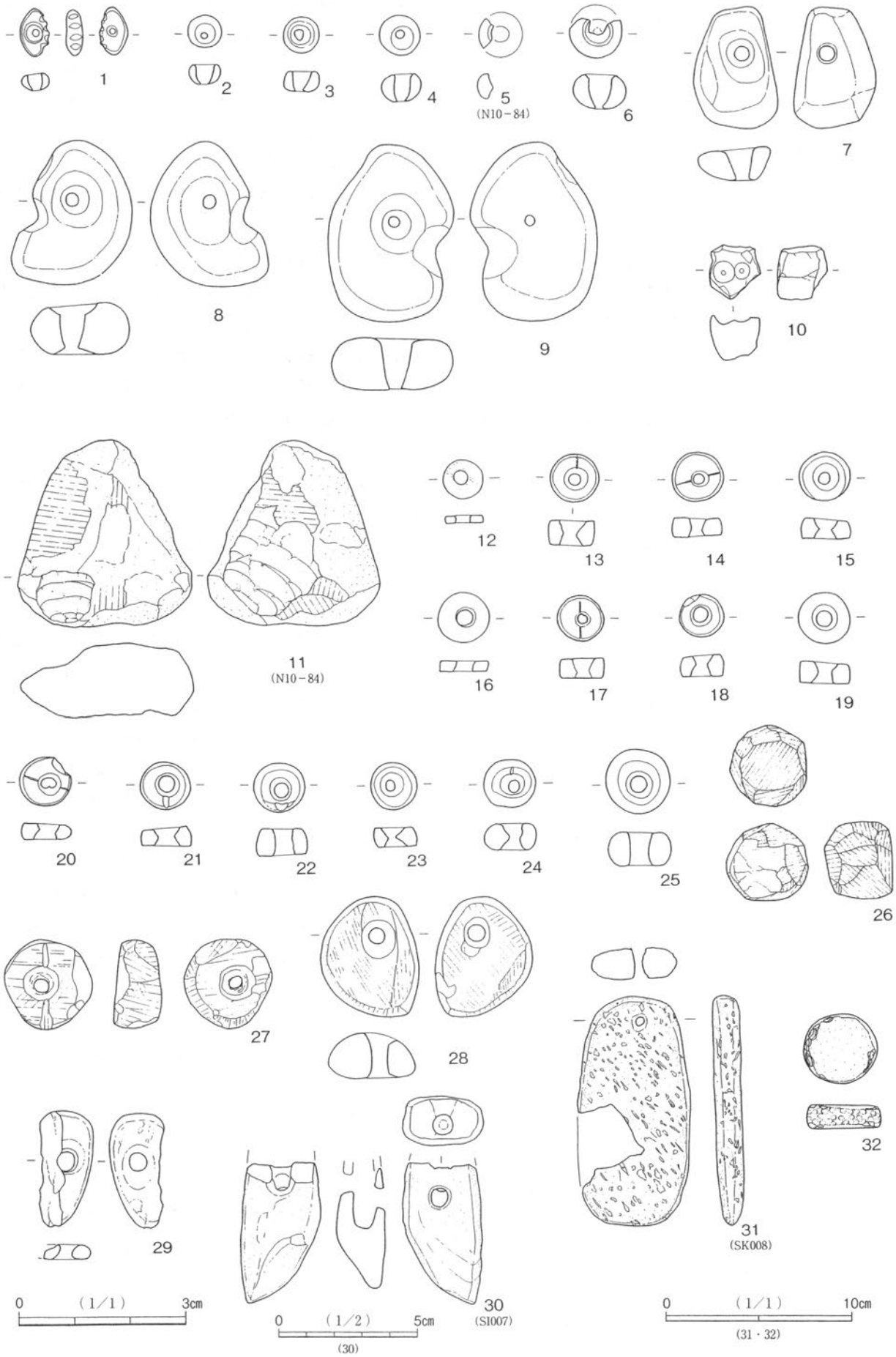
調査では加曽利ＥⅢ式期から晩期前半までに構築された竪穴住居約40軒をはじめ、後期前葉から晩期前半に形成された貝層の一部の状況が明らかにされ、土器を主体に多量の遺物が出土した。

玉類は発掘によって30点以上が出土したほか、表採資料の紹介もあり、千葉東南部地区の遺跡の中では、最も充実した内容を提示している。第５図は報告書第210図からの転載である。個々の属性については、同じく報告書の付表を掲載した。

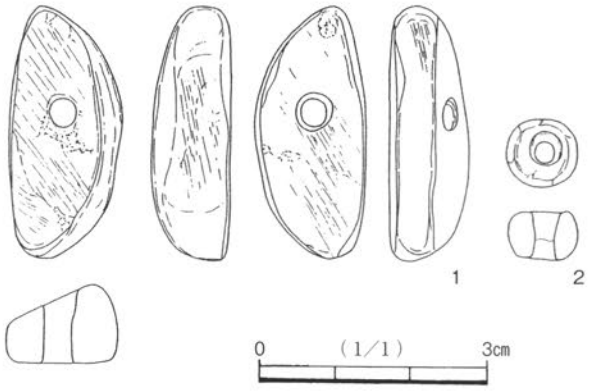
玉の種類は、大珠、小玉、垂飾、勾玉、臼玉と多彩である。石材は、滑石、翡翠、蛇紋岩が認められ、翡翠と滑石には未成品が含まれている。特に滑石の未成品には製作の段階を示す資料が存在し、遺跡内での小規模な攻玉が考えられる。

これら発掘によって出土した玉類の中で、遺構から出土しているのは僅かに第５図－30の１点である。これは一部を欠いている欠損品であるが、現存長が50.4㎜あり、大珠の部類に含まれる。横方向に貫通する孔のほか、縦方向から穿孔し横方向の孔と合流する。孔の断面形がＴ形となる特殊な穿孔を行っている。緒締形の大珠と考えられるが欠損部が惜しまれる。火熱を受けた痕跡が認められ、石材は不明である。加曽利ＥⅣ式期の竪穴住居からの出土である。

もう１点８が溝から出土しているが、この溝は古代以降の構築であり、何らかの経過によって覆土中に



第5図　東南部地区出土玉類（5）



第6図　東南部地区出土玉類（6）

入ったと考えられる。

表採の玉類は、研究連絡誌上で西野雅人氏と筆者が紹介した第6図－1翡翠製垂飾1点と、2の丸玉1点である（西野小林1994）。

3．千原台ニュータウン内の遺跡

（8）草刈遺跡

市原市ちはら台西・ちはら台南に所在する。南側に村田川が流れ、北側を茂呂谷津と称される谷に挟まれた幅150m～400m、長さ1500mの東西に長い標高27m～40mの台地上に展開する。調査は、昭和53年に開始され平成10年に終了した。遺跡が広大であるため、調査区をA区～P区に分け、調査区毎に報告書を刊行している。遺跡の時代は、旧石器時代から近世にわたり、縄文時代に関しても早期から晩期の土器が出土している。これまでの報告書の刊行年にしたがって紹介しておきたい。

A区は遺跡のほぼ中央部北側の調査区で、南側に中期の環状集落である草刈貝塚が展開する。縄文時代の遺構分布は僅かである（小久貫ほか1983）。第7図－1～3の3点が縄文時代の玉類と考えられる。いずれも後世の遺構から出土しており、本来の帰属時期は不明である。1は三角形を呈し頂部近くに孔が穿たれている。紐ずれのためか孔の形態が楕円形になっている。石材は蛇紋岩と見られ、大変良好に研磨が施され、研磨痕跡が残らないように仕上げられている。色調は淡緑灰色を呈し、光沢を放って美しさを感じる。2は環状を呈し、側面からも穿孔が行われている。欠損品で、穿孔側に近い破断面には研磨の状況が認められないが、穿孔部の対向側は研磨痕跡が見られる。玦状耳飾の欠損品の可能性がある。石材は滑石である。3は滑石製玦状耳飾の欠損品である。

A区の南側に位置するB区は、草刈貝塚の約3分の2が含まれる調査区である。集落は阿玉台Ⅰb式期から加曽利EⅡ式期にわたって営まれ、この調査区の中でも竪穴住居177軒、小竪穴573基が検出されている（高田ほか1986）。

B区からは6点の石製品が報告されている。ただ1点については石材が砂岩で、残存部に穿孔の痕跡が認められないため、本稿では除外しておきたい。

第7図－4は翡翠製の鰹節形大珠である。透明感は欠けるものの、乳緑色が縞状に入り込んでいて見た目の美しさがある。ただ、やや全体に黄変しており、熱を受けた可能性がある。上野修一氏の提唱する被熱度Level 1程度の被熱であろう[註2]。長さは68㎜、幅36㎜、厚さ20㎜で重量は108gである。

5は濃緑色で乳青色の部分が一部にしか認められないことから、報告書では、石材は蛇紋岩との同定を行っている。筆者の肉眼観察では、翡翠として問題ないと見ている。長さ55㎜、幅34㎜で、厚さは28㎜と厚い。いずれも片側穿孔である。また、遺構外の出土である。

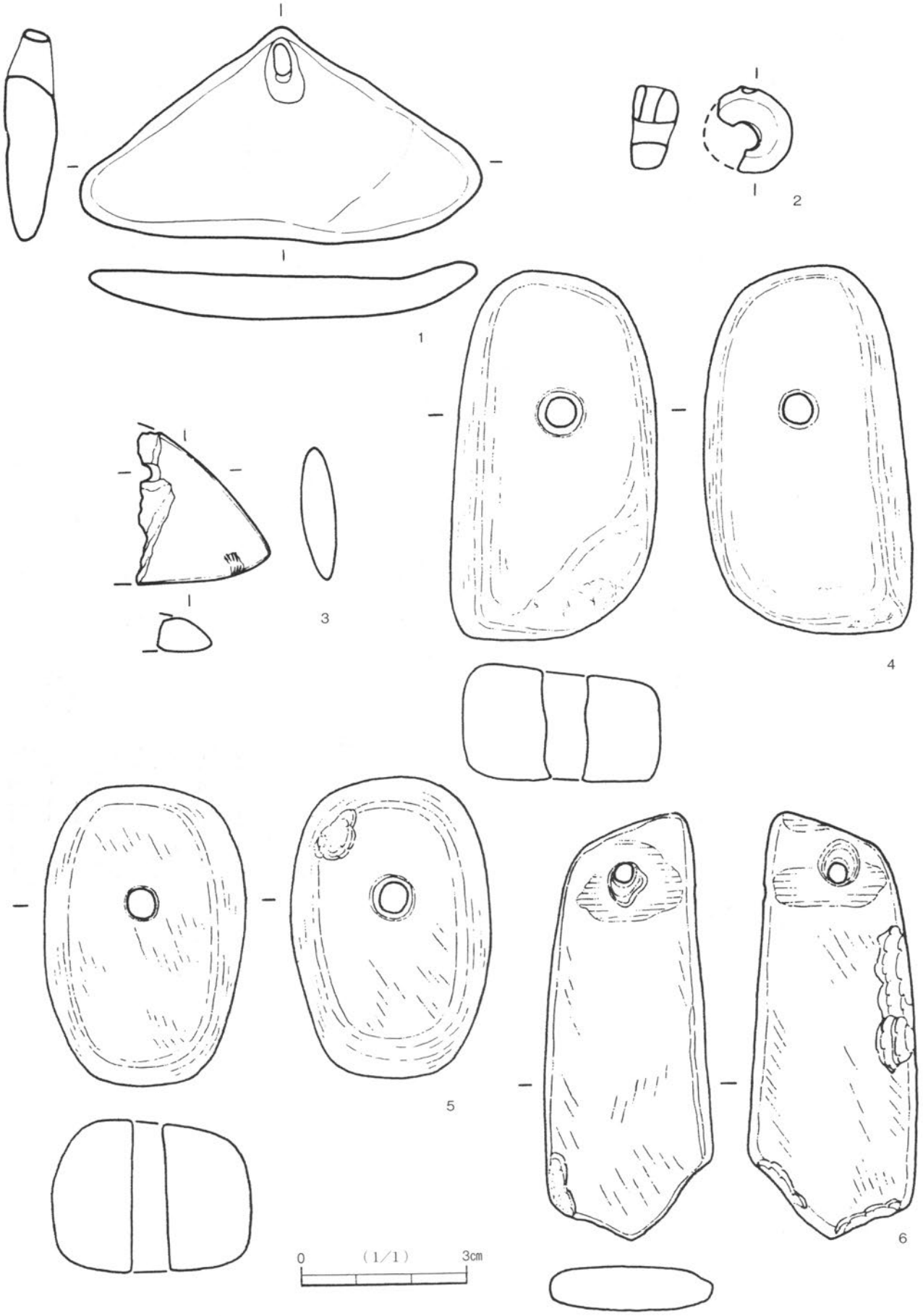
6は蛇紋岩製の垂飾である。図の右側に擦切痕が僅かに認められ、上端に近い位置に穿孔を施し、下端部には磨きが及ばない部分が存在する。長さ79㎜である。下端部は欠損後に破断面の磨きを行っている可能性もあり、本来の長さはもう少し長かったかもしれない。加曽利EⅠ式期～Ⅱ式期の竪穴住居の床面から出土している。

第8図－1は楕円形を呈する垂飾と考えられる。上端部近くに穿孔部が存在していたと見られ、欠損部の破断面にその痕跡が残る。欠損後に孔の位置を変更してさらに使用し続けたと見られる。石材は滑石で、表採である。

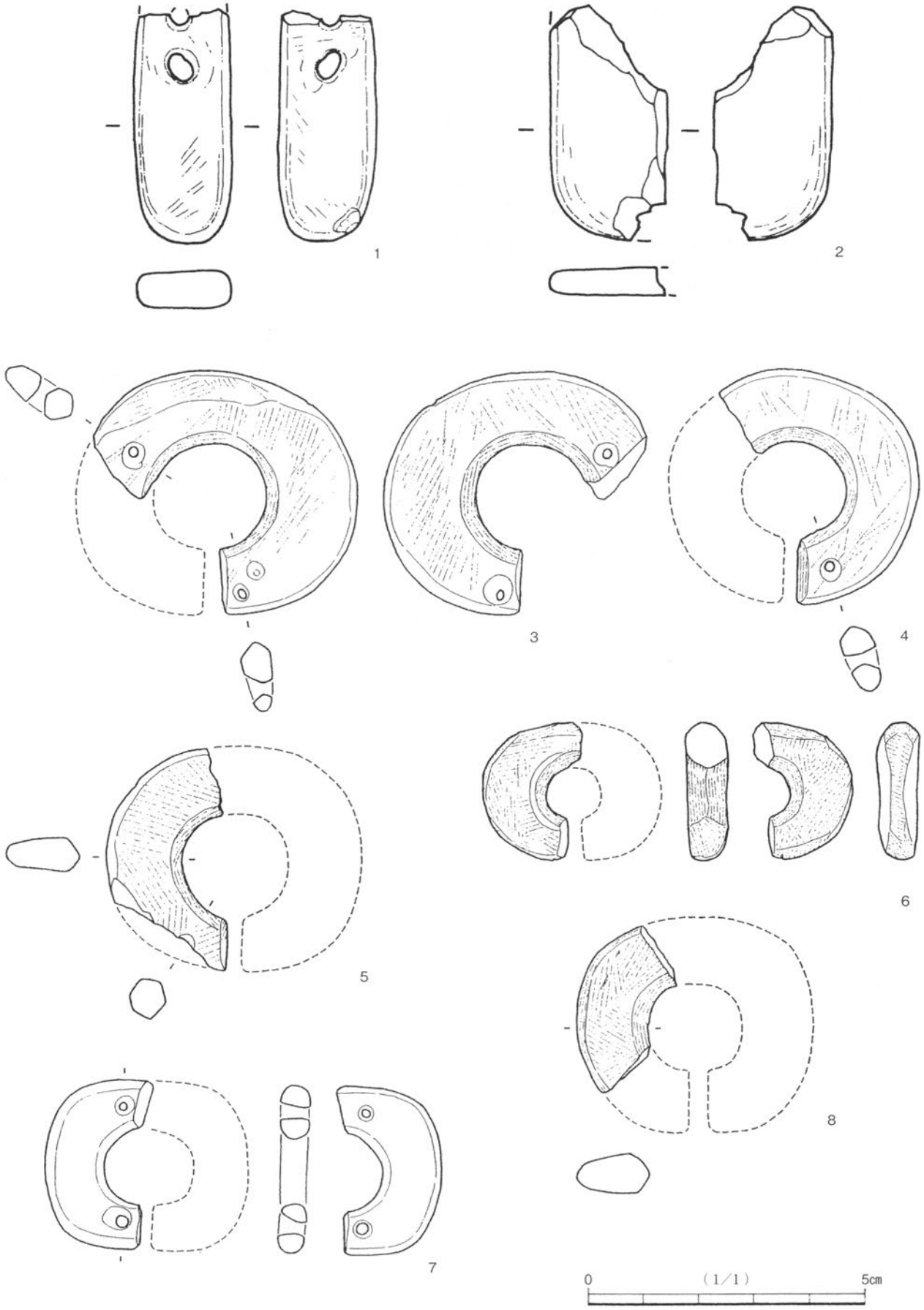
2は一部分の遺存で全体の形態は不明である。4に近い形が考えられる。石材は凝灰岩で乳白色である。

草刈遺跡の中央部南側に所在する草刈貝塚の中心部から東側については、東部地区縄文時代としてまとめられ報告書が刊行されている（伊藤 大谷 西野2003）。この地区では、縄文時代中期の竪穴住居や小竪穴が検出されているほか、早期の撚糸文系土器から晩期にわたる土器が出土している。比較的広範囲に出土している土器の時期は、早期と前期の土器群である。

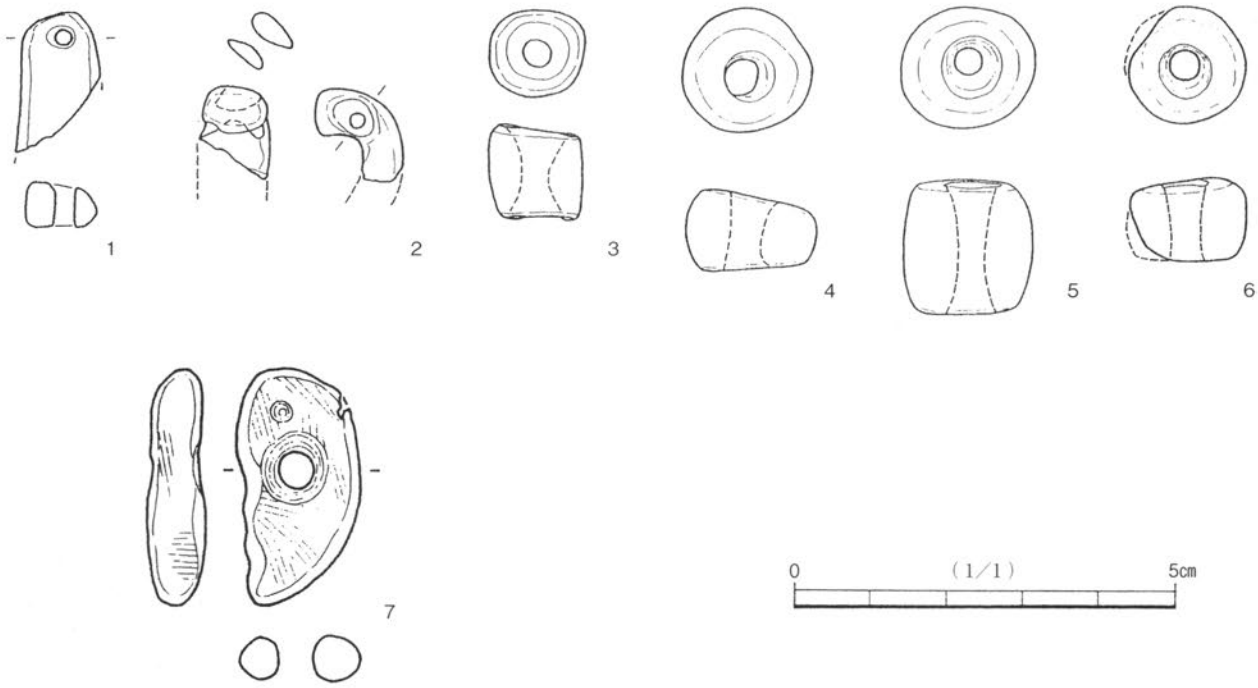
玉類は第8図－3～第9図－6の12点が報告されている。遺構に伴う状態での出土は皆無である。内訳は第8図－3～8の6点が玦状耳飾で最も多く出土して



第7図　千原台地区出土玉類（1）



第８図　千原台地区出土玉類（２）



第９図　千原台地区出土玉類

いる。石材はすべて蛇紋岩である。第９図－１は垂飾の欠損品である。２は欠損しているので本来の形態が明らかではないが、勾玉形の頭部とも見られる。３と５が管玉状の玉である。また、４と６が丸玉になる。これらの石材もすべて蛇紋岩である。

上記以外では、H区出土の玉類が、当時の調査担当者の１人であった福田依子氏によって紹介されている（福田1990）。それは中峠式期の竪穴住居から出土した玉類で、琥珀製の玉２点と36点の滑石製臼玉である。琥珀製の玉２点については縄文時代中期の遺物として間違いないが、臼玉については、古墳時代中期から後期の製作時期が妥当と考えられる成品である。福田氏も出土状態のみを根拠に縄文時代の遺物と考えたようで、「大きさや形状で系譜的に追える資料は今のところ見当たらない」と、慎重な扱いも見せている。その後も縄文時代に比定される同様の玉の発掘例は存在しない。古墳時代の遺物の混入と解釈すべき遺物で、縄文時代の石製玉類には含めないでおきたい。

草刈貝塚の環状集落の西側部分を含むH区は、整理作業の進捗途中にあるが、新たな石製玉類は出土していない。ただ、琥珀製の玉類には、上記資料以外に追加資料が認められる。

（９）押沼大六天遺跡

市原市ちはら台東４丁目に所在する。草刈遺跡の北側を現東京湾から東方向に入り込む茂呂谷津の最奥の、標高50m～53mの台地上に立地する。

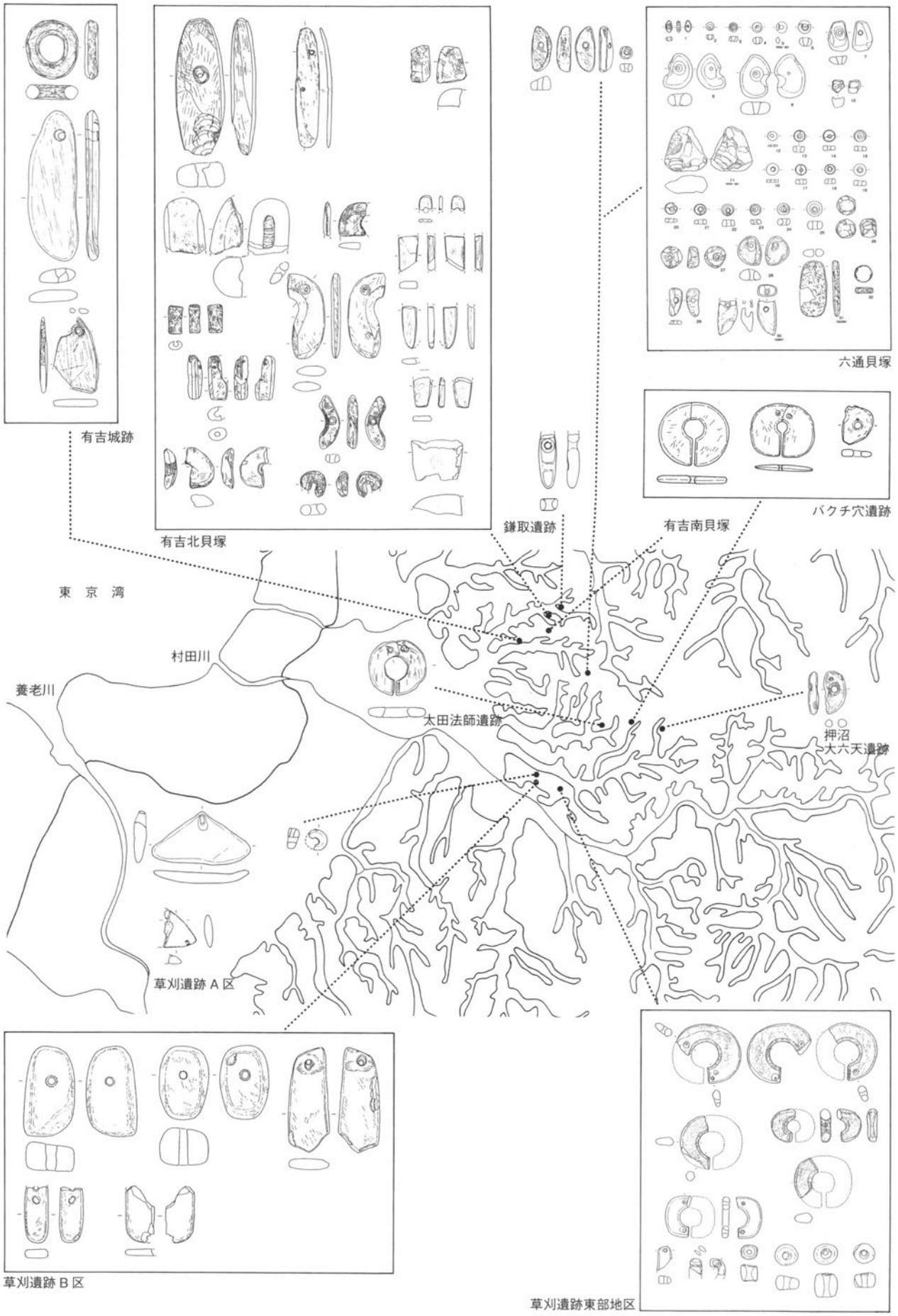
遺構は早期の炉穴、前期の竪穴住居等が検出され、包含層からも条痕文系土器と諸磯式・浮島式土器の出土が目立っている（黒沢 西野ほか2004）。

玉類では、遺構外から出土した垂飾１点が挙げられる。第９図－７は本来玦状耳飾であったと考えられ、破損した後に破断面やその周辺に研磨を施し、中央部に穿孔を行って、垂飾に作り直した思われる。石材は滑石である。

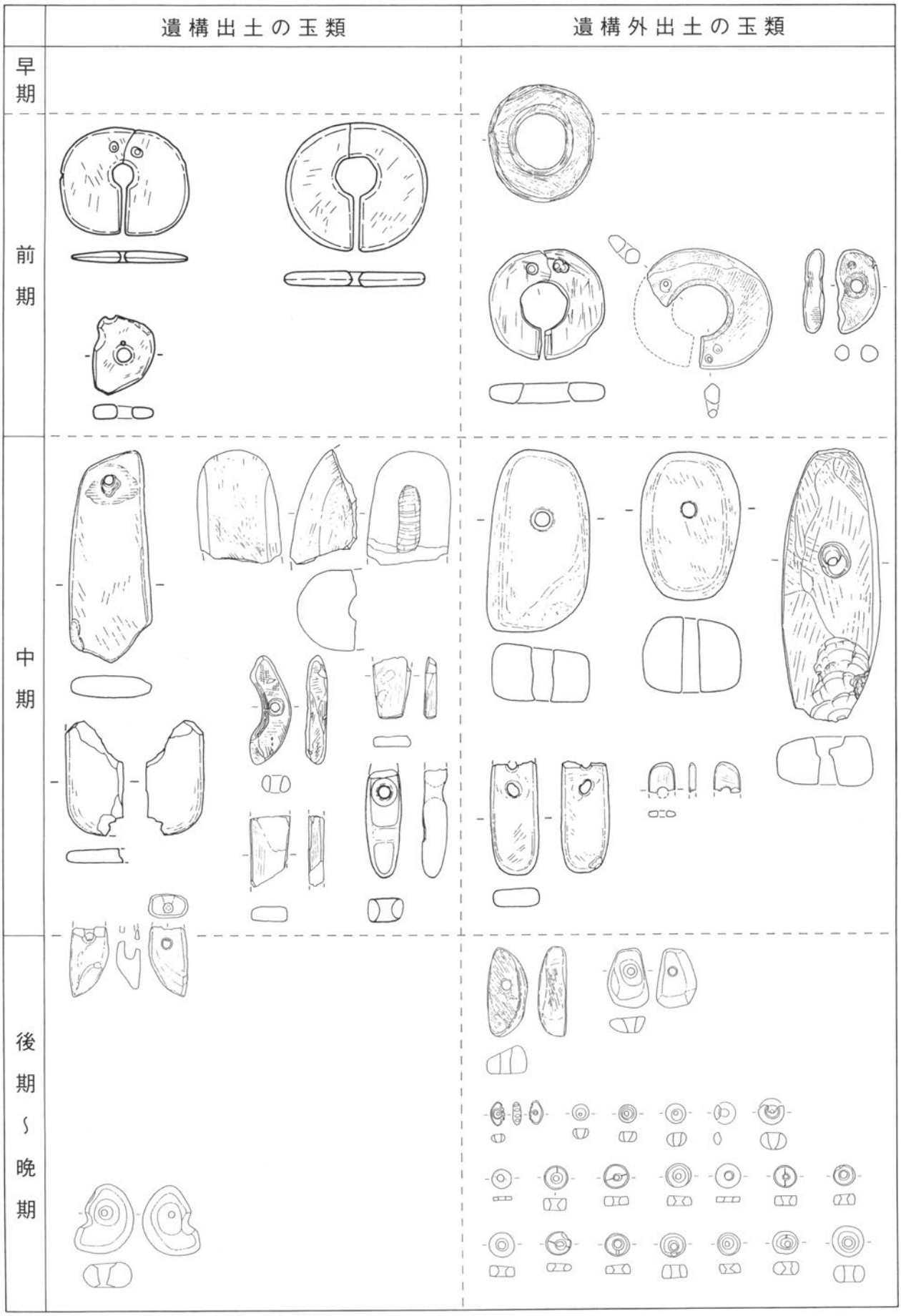
４．地域の特徴

以上が当地域から出土した石製玉類である。地区別の内訳を示すと、東南部地区では７遺跡で出土し、千原台地区からは２遺跡で出土している。東南部地区内における調査遺跡は39か所で、その中で縄文時代の遺跡は20か所を数える（西野2007）。また、千原台地区では、17遺跡の調査を行い、縄文時代の遺構、または遺物を検出した遺跡は14遺跡である。したがって、縄文時代の遺跡34遺跡の調査で、玉類の出土が確認されたのは、９遺跡にすぎない。この遺跡数が少ないのか、多いのかは今は不明である。

次に時期別の傾向についてふれてみたい。石製の玉類は、県内の旧石器時代の遺跡である四街道市出口・鐘塚遺跡からの出土が知られ、本例が周辺における最古の資料に位置づけられる（渡辺1989）。しかし、継続する様相は看取されず、縄文早期段階に至っても盛行するという状況は認められない[註3]。当地域にお



第10図　玉類出土遺跡分布図



第11図　時期別出土玉類

いては、玦状耳飾が出土する前期から存在が確認される。この状況は周辺地域の様相と一致する現象であろう。

バクチ穴遺跡では、３点の玦状耳飾が土坑から出土し、草刈遺跡東部地区においても６点の玦状耳飾が出土している。ただ、いずれも土器を伴った状態での出土ではなく、時期の細別は困難である。玦状耳飾のほかには、太田法師遺跡でやや大型の垂飾が出土し、押沼大六天遺跡でも玦状耳飾を再製した垂飾が出土している。前期の在り方としては、玦状耳飾と玦状耳飾を再製した垂飾が目立ち、それに垂飾が加わる、ということになろう。また、草刈遺跡東部地区で出土している管玉状の玉類も、前期に含められるかもしれないが、断定はできない。

有吉城跡から出土している環状の石製品は、周辺から僅かに出土している早期の土器を拠り所に、早期の遺物と考えた。その時期の可能性も否定できないと思っているが、判断は慎重に行う必要があると考えている。この形態は１点のみである。

中期では、３か所の貝塚を伴う環状集落が調査され、そのいずれからも翡翠製大珠が出土している点が注目される。有吉北貝塚からは、被熱が認められ、破損した緒締形大珠が出土している。また、別に被熱痕跡が認められ破損状態の破片１点が出土しており、これも大珠と考えられる。有吉南貝塚からも破損した翡翠製大珠が出土している。草刈遺跡Ｂ区（草刈貝塚）では、２点の鰹節形翡翠製大珠が完形の状態で検出されている。この５点の中で遺構に伴う大珠は有吉北貝塚から出土した破損品の１点である。同一個体と考えられるもう１点の破損品はグリッドの調査で検出されている。草刈貝塚から出土している１点（第７図－５）は、集落の南東側に当たるグリッドから出土し、遺構には伴っていない。このグリッド周辺は縄文時代の竪穴住居が重複し、その上に後世の遺構が存在する。竪穴住居に伴っていた可能性もあるが、いずれにせよ、その竪穴住居の特定は難しい状況である。

栗島義明氏は、翡翠製大珠が環状集落における土坑群の、特定空間から集中的に出土する事例の存在を指摘する（栗島2004・2007）。しかし、本地域の環状集落ではそのような傾向は捉えられない。地域による硬玉製大珠の在り方の１つになるのであろうか。

硬玉製大珠のほかには石英製の大珠が有吉北貝塚から検出されている。また、大珠以外の垂飾が有吉北貝塚、草刈遺跡Ｂ区、鎌取遺跡で出土している。中期は、中峠式期から加曽利ＥⅠ式期ころに、拠点集落において大珠が盛行し、その後小型の垂飾が中心となり、大珠は影を潜めていく状況が窺われる。

後期から晩期の遺跡では、六通貝塚からまとまった点数が出土している。石材は翡翠、滑石、蛇紋岩である。特に滑石製品は製作工程がわかる未成品・成品が揃い、貝層北縁部の外側斜面に集中する状況も看取されている。さらには多量に出土している砥石の中に、僅かながら筋砥石も含まれている。遺跡内での攻玉を示す資料である。

筆者はかつて県内における攻玉遺跡についてふれ、13か所の遺跡で攻玉が行われていた可能性を指摘した（小林2004）。その後、佐倉市曲輪ノ内貝塚（阿部ほか2004 小栗2005）、加曽利南貝塚（阿部ほか2004）での攻玉を知った。それに追加すべき遺跡が六通貝塚となったのである。しかし、攻玉遺跡の認定の方法如何では、それら16遺跡も、単に玉の出土遺跡にすぎなくなってしまう。攻玉遺跡の定義は、検討されなければならない問題を残している。例えば翡翠の産出地に近接する攻玉遺跡と、千葉県などの在地産と推定される石材を用いた、自給自足的な玉作り遺跡を同列で扱うのか、何と何が揃ったら攻玉遺跡と認定するのか、本例のような遺跡をどう見るのか、等々である。以上の点は、この地域の中だけの課題ではないので、別に考えることとし、もう一度六通貝塚に戻したい。

六通貝塚で出土した臼玉は上下面が平坦で、断面の側面は直線的になる部類と、やや張りをもつ類が認められる。晩期後葉以降に帰属すると考えられる。また、翡翠については原石と石核が各１点出土しているが、報告者の西野雅人氏が、翡翠の「原石や未成品は石材自体の保有に意味があった」と述べているように（西野2007）、六通貝塚のような地域の拠点集落で出土した点が示唆的である。

５．おわりに

以上のように、千葉東南部ニュータウンと千原台ニュータウンの造成に伴って出土した縄文時代の石製玉類は80点を超す点数になった。しかし、全遺跡の遺物にもう一度目をとおす時間はなかったので、当然のことながら、資料の抽出漏れがあるかもしれない。この集成によって、当地域の特色を垣間見るという課題の達成も心許ない。周辺地域の状況を見ていかなければ、地域の特色も現れてこないだろうし、さらに全国的な推移の中での検討も必要になるだろう。

今回の集成に当たり、石材等で疑問に思った玉類の一部については、現物を実見して報告書とは異なる石材に変更した部分もある。これもあくまでも筆者の肉眼での同定であり、また、全資料に当たった訳ではないので、必ずしも正確な石材名でないものもあるかもしれない。それぞれの報告書において、石材の同定を行った方々にご迷惑をおかけすることになりかねないので、報告書と異なる石材名についての責は、すべて筆者にあることをここに明らかにしておきたい。

小論の執筆に際し、多忙な日常業務遂行の間にもかかわらず、遺物の実見等で、千原台地区の担当者である蜂屋孝之氏、田島新氏、東南部地区の担当者である西野雅人氏に大変お世話になりました。また、収蔵遺物の検索や、実測等で中央調査事務所の補助員の皆さんの協力を得ました。以上の方々に記して感謝申し上げます。

註

1．今回掲載した実測図は、第５図を除き基本的には報告書の図を原寸に拡大コピーして使用した。ただ、平面図・側面図等の間隔は、拡大に応じてそれぞれ間隔を詰めているので、一部は改変を行っている。また、第１図－６は再実測を行って提示している。さらに有吉北貝塚から出土し、報告書に実測図の掲載がなされなかった５点については、今回新たに実測・トレースを行って第４図に提示した。

2．上野修一氏の提唱する硬玉製大珠の「被熱度」設定（上野2007）に照合して判断した。上野氏の設定では、Level 1は、「被熱の結果、少しずつ色調が黄変しているものを、被熱レベル１とする。表面の光沢感などは変化が少なく、ヒビ割れ等もあまり顕著では無いが、全体にやや黄褐色化した状態である。写真撮影を行った際、何となく黄色味がかった印象が残る資料は、大半が本レベルに含まれるものと予想される」ものであり、Level 3は「表面の光沢感や透明感が失われて、全体に細かな剥離や粉状化が顕著になるもの」とういような状態である。さらに上野氏は、「分割・再製」「敲打・再穿孔」「彩色」を翡翠製大珠の二次的変形と位置づけ、それらのもつ意味を縄文社会の経過の中で探ろうとしている。傾聴すべき意見で、今後は上野氏の分析視点を常に意識して、出土玉類を観察する必要性を感じた。

3．早期段階に、玉類の出土傾向に継続性が見えなくなる事象について、筆者は次のように考えたことがある。それは、「孔を穿つ方法と技術はすでに獲得されていたので、各種石材への応用はいくらでも可能であった」のにもかかわらず、「発展の様相が看取されないのは、技術面の未克服が残されていたのではなく、需要とか原材料の入手ルート等、当時の社会を取り巻く情勢が第一にあった」と思ったのである（小林1992）。縄文社会の発展過程において、玉類の必要性が低い時期があったと考えられる。

参考文献

阿部芳郎ほか 2004「縄文時代後・晩期における奥谷型遺丘集落の研究－千葉県佐倉市曲輪ノ内貝塚の調査方法を考える－」『駿台史学』第122号 駿台史学会

伊藤智樹 大谷弘幸 西野雅人2003『千原台ニュータウンⅧ－市原市草刈遺跡（東部地区縄文時代）－』（財）千葉県文化財センター

上野修一 2007「焼かれた玉 －硬玉製大珠の二次的変形－」『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会　第５回シンポジウム栃木大会実行委員会

大野康男ほか 1984『千葉東南部ニュータウン－馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡－』（財）千葉県文化財センター

小笠原永隆　西野雅人　田島新　1998『千葉東南部ニュータウン19－有吉北貝塚１（旧石器・縄文時代）－』（財）千葉県文化財センター

小久貫隆ほか 1983『千原台ニュータウンⅡ－草刈Ａ区（１次調査）・鶴牧古墳群・人形塚－』（財）千葉県文化財センター

小栗信一郎 2005「千葉県流山市三輪野山貝塚出土の玉類（１）」『玉文化』第２号 日本玉文化研究会

加藤修司 西野雅人 渡邉高弘 2002『千葉東南部ニュータウン25 －千葉市有吉城跡１（縄文時代以降）－』（財）千葉県文化財センター

上守秀明　西野雅人 1993『千葉東南部ニュータウン18－鎌取遺跡－』（財）千葉県文化財センター

栗島義明 2004「硬玉製大珠の交易・流通」『季刊 考古学』第89号 雄山閣

栗島義明 2007「威信財流通の社会的形態 －硬玉製大珠から探る縄文時代の交易－」『縄文時代の社会と玉』日本玉文化研究会　第５回シンポジウム栃木大会　実行委員会

黒沢崇 西野雅人ほか2004『千原台ニュータウンＸⅡ－市原市押沼大六天遺跡（上層）－』（財）千葉県文化財センター

郷田公子 大野康男ほか 1983『千葉東南部ニュータウン－バクチ穴遺跡・有吉遺跡（第３次）・有吉南遺跡－』（財）千葉県文化財センター

小林清隆 1992「旧石器～縄文時代の玉」『研究紀要』13（財）千葉県文化財センター

小林清隆 2004「房総の攻玉遺跡」『史館』第33号　史館同人

白井久美子ほか1994『千原台ニュータウンⅥ－草刈六之台遺跡－』（財）千葉県文化財センター

高田博ほか 1986『千原台ニュータウンⅢ－草刈Ｂ区－』（財）千葉県文化財センター

西野雅人 小林清隆 1994「千葉市内縄文時代遺跡表採の玉」『研究連絡誌』第39号（財）千葉県文化財センター

西野雅人 2007『千葉東南部ニュータウン37－千葉市六通貝塚－』（財）千葉県教育振興財団

西野雅人2007「鎌取遺跡」『千葉縄文研究別冊Ⅰ』千葉縄文研究会

福田依子 1990「草刈貝塚出土の小玉について」『研究連絡誌』第28号（財）千葉県文化財センター

森本和男 2001『千葉東南部ニュータウン23－千葉市太田法師遺跡２（縄文時代以降）－』（財）千葉県文化財センター

安井健一 四柳隆 2006「有吉南貝塚出土の「腰飾り」を着装した埋葬人骨について」『千葉縄文研究』創刊号 千葉縄文研究会

安井健一 2006「有吉南貝塚出土の底面に線刻を有する土器について」『千葉縄文研究』創刊号 千葉縄文研究会

四柳隆2000「有吉南貝塚」『千葉県の歴史　資料編考古１（旧石器・縄文時代）』千葉県

渡辺政治 1989「物井地区出口・鐘塚遺跡出土の垂飾様石製品について」『研究連絡誌』第24号（財）千葉県文化財センター

表１　千葉東南部地区・千原台地区出土玉類一覧

No.	挿図番号	遺　跡　名	時　期	種　類	石　材	状態	出土状況
1	第１図－１	バクチ穴遺跡	(前期)	玦状耳飾	滑石	完形	土坑
2	第１図－２	バクチ穴遺跡	(前期)	玦状耳飾	滑石	完形　補修孔	土坑
3	第１図－３	バクチ穴遺跡	(前期)	玦状耳飾	滑石	垂飾に再製	土坑
4	第１図－４	鎌取遺跡	中期　加曽利ＥⅢ	棒状垂飾	滑石	欠損品	竪穴住居
5	第１図－５	太田法師遺跡	(前期)	玦状耳飾	滑石	完形　補修孔	グリッド
6	第１図－６	有吉城跡	(前期)	垂飾？	頁岩？	完形	グリッド
7	第２図－１	有吉城跡	中期？	玦状耳飾		欠損品	グリッド
8	第２図－２	有吉城跡	早期？	環状石製品	蛇紋岩	完形	グリッド
9	第２図－３	有吉北貝塚	中期	大珠	石英	下端部一部欠損	斜面貝層
10	第２図－４	有吉北貝塚	中期	ヘラ状	翡翠？	穿途中あり	斜面貝層
11	第２図－５	有吉北貝塚	中期　加曽利ＥⅠ	大珠	翡翠	欠損品 被熱　図３－１と同一	グリッド
12	第３図－１	有吉北貝塚	中期　加曽利ＥⅠ	大珠	翡翠	欠損品 被熱　図２－５と同一	竪穴住居
13	第３図－２	有吉北貝塚		玦状耳飾	滑石	欠損品	南斜面
14	第３図－３	有吉北貝塚		玦状耳飾	滑石	欠損品　再製	不明
15	第３図－４	有吉北貝塚		管玉状	緑色凝灰岩	側面からの穿孔	不明
16	第３図－５	有吉北貝塚		管玉状	滑石	欠損品　側面から横方向に穿孔	南斜面
17	第３図－６	有吉北貝塚	中期　加曽利ＥⅠ	垂飾	滑石	玦状耳飾の再製？	竪穴住居
18	第３図－７	有吉北貝塚		玦状耳飾	滑石	欠損品	南斜面
19	第３図－８	有吉北貝塚		玦状耳飾	滑石	欠損品	南斜面
20	第４図－１	有吉北貝塚	中期	垂飾	滑石	欠損品	土坑
21	第４図－２	有吉北貝塚	中期	垂飾	粘板岩	欠損品	土坑
22	第４図－３	有吉北貝塚	中期	垂飾	チャート	欠損品	北斜面
23	第４図－４	有吉北貝塚	中期	垂飾	翡翠	欠損品　被熱	南斜面
24	第４図－５	有吉北貝塚	中期	垂飾	蛇紋岩	欠損品	グリッド
25	1	有吉南貝塚	中期	大珠	翡翠	破片　被熱？	
26	2	有吉南貝塚	中期	垂飾	滑石	欠損品	
27 ｜ 58	第５図－１ ｜ 第５図－32	六通貝塚	中期末～晩期	表２に掲載			
59	第６図－１	六通貝塚		小珠	翡翠	完形	表採
60	第６図－２	六通貝塚		丸玉	滑石？	完形	表採
61	第７図－１	草刈遺跡Ａ区	中期？	垂飾	蛇紋岩	完形	後世の遺構
62	第７図－２	草刈遺跡Ａ区	中期？	玦状耳飾？	滑石	欠損品	後世の遺構
63	第７図－３	草刈遺跡Ａ区	中期？	玦状耳飾	滑石	欠損品	後世の遺構
64	第７図－４	草刈遺跡Ｂ区	中期	大珠	翡翠	完形　被熱	トレンチ
65	第７図－５	草刈遺跡Ｂ区	中期	大珠	翡翠	完形　敲打痕	グリッド
66	第７図－６	草刈遺跡Ｂ区	中期　加曽利ＥⅠ～Ⅱ	垂飾	蛇紋岩	擦切痕跡あり	竪穴住居
67	第８図－１	草刈遺跡Ｂ区		垂飾	滑石	欠損品　穿孔２か所	表採
68	第８図－２	草刈遺跡Ｂ区	中期	垂飾	凝灰岩	欠損品	竪穴住居
69	第８図－３	草刈遺跡東部地区	前期？	玦状耳飾	蛇紋岩	欠損品　補修孔	表採
70	第８図－４	草刈遺跡東部地区	前期？	玦状耳飾	蛇紋岩	欠損品　補修孔	業際
71	第８図－５	草刈遺跡東部地区	前期？	玦状耳飾	蛇紋岩	欠損品	グリッド
72	第８図－６	草刈遺跡東部地区	前期？	玦状耳飾	蛇紋岩	欠損品	後世の遺構
73	第８図－７	草刈遺跡東部地区	前期？	玦状耳飾	蛇紋岩	欠損品　補修孔	後世の遺構
74	第８図－８	草刈遺跡東部地区	前期？	玦状耳飾	蛇紋岩	欠損品	後世の遺構
75	第９図－１	草刈遺跡東部地区		垂飾	蛇紋岩	欠損品	後世の遺構
76	第９図－２	草刈遺跡東部地区		勾玉形	蛇紋岩	欠損品	表採
77	第９図－３	草刈遺跡東部地区		管玉状	蛇紋岩	完形	グリッド
78	第９図－４	草刈遺跡東部地区		丸玉	蛇紋岩	完形	後世の遺構
79	第９図－５	草刈遺跡東部地区		管玉状	蛇紋岩	完形	後世の遺構
80	第９図－６	草刈遺跡東部地区		丸玉	蛇紋岩	一部欠損	後世の遺構
81	第９図－７	押沼大六天遺跡	前期？	垂飾	滑石	玦状耳飾の再製か	グリッド

表２　六通貝塚出土玉類一覧

No.	分類	遺構	石材	最大長	最大径	重量	注記	穿孔	備考
1	小玉	M08-40	ヒスイ	3.14	8.47	0.13	M08-40-53	片面	楕円形。側面刻み4条。研磨光沢
2	小玉	L08-63	ヒスイ	3.92	5.64	0.12	L08-63	片面	全面研磨光沢
3	小玉	M08-40	ヒスイ	4.47	6.23	0.19	M08-40-23	片面	全面研磨光沢
4	小玉	H11-49	ヒスイ	5.05	6.97	0.33	H11-49-402	片面	全面研磨光沢
5	小玉	N10-84	緑色系	5.68		0.11	N10-84	両面	欠損。穿孔部･外面に線状痕。割れ口摩滅＝軟質、透明感ない緑色
6	小玉or丸玉	L08-94	ヒスイ	6.17	8.97	0.38	L08-94	片面	色調変化・劣化（被熱か）した玉成品にやや粗い研磨・線状痕。後欠損
7	垂玉	L08-02	ヒスイ	21.76	14.87	4.16	L08-02	片面	全面研磨光沢。保存良好、表面光沢顕著
8	勾玉	SD013	ヒスイ	25.65	25.91	8.68	113-311-4	片面	全面研磨光沢。加工後表面風化
9	勾玉	H12-04	ヒスイ	31.43	22.01	13.00	H12-04-14	片面	全面研磨光沢。加工後表面風化
10	玉未成品	N08-61	ヒスイ	7.98	9.73	0.90	N08-61-35	途中	穿孔途中２か所もつ形割段階の未成品
11	玉原石	N10-84	ヒスイ	6.50	8.72	19.84	N10-84-2	－	原石、表面風化。後平坦部数箇所研磨・弱い線状痕
12	臼玉	L08-49	滑石	1.65	7.06	0.12	L08-49-7	両面	加工後、白色化・劣化＝被熱か。研磨痕観察不能だが整った形状
13	臼玉，未成品？	N08-31	滑石	4.27	8.41	0.47	N08-31	両面	未成品？側面粗い線状痕。１面に基準線
14	臼玉，未成品？	M08-46	滑石	3.48	9.02	0.48	M08-46-13	両面	未成品？側面粗い線状痕。１面に基準線
15	臼玉	M08-47	滑石	3.98	8.94	0.42	M08-47-30	両面	全面仕上げ研磨。やや丸み。孔に紐擦れ＝使用か
16	臼玉	M08-62	滑石	2.13	8.74	0.27	M08-62-48	両面	全面仕上げ研磨。形状整った精製品
17	臼玉	M08-68	滑石	3.91	8.12	0.42	M08-68-45	両面	全面・孔仕上げ研磨。１面に基準線残る
18	臼玉	M08-69	滑石	4.46	7.92	0.34	M08-69-20	両面	全面・孔仕上げ研磨するが、側面一部粗い研磨面残し不整形
19	臼玉	M08	滑石	4.33	9.19	0.58	113-308-123	両面	全面仕上げ研磨。形状整った精製品。SD017溝混入
20	臼玉	N08-32	滑石	3.12	8.61	0.33	N08-32	両面	全面仕上げ研磨。形状整った精製品だが２面にわずかな基準線。孔紐擦れ＝使用か。一部欠損
21	臼玉	N08-41	滑石	4.21	8.84	0.36	N08-41-38	両面	全面・孔仕上げ研磨するが、片面凹凸顕著。反対は平坦で基準線残す。薄い剥片素材か。
22	臼玉	N08-41	滑石	4.75	9.08	0.57	N08-41-55	両面	全面加工後摩滅。側面やや粗い線状痕もつが仕上げ研磨品か。欠け状は加工前
23	臼玉	N08-60	滑石	3.57	8.43	0.38	N08-60-41	両面	全面加工後摩滅。側面やや粗い線状痕もつが仕上げ研磨品か。欠け状は加工前。孔に紐擦れ＝使用か
24	丸玉	M08-58	滑石	5.39	9.07	0.54	M08-58-19	両面	全面加工後摩滅。丸く、平坦面なし。仕上げ研磨品か。片面基準線あり。加工後欠損あり
25	丸玉	K10-88	蛇紋岩	6.61	11.51	1.23	113-073-17	両面	全面研磨加工。線状痕見えない。丸く、平坦面なし。素材は硬質。SD036溝混入
26	玉未成品	H11-19	滑石	12.05	13.88	3.88	H11-19-123		荒研磨段階の未成品。ごく粗い線状痕もつ研磨面多数。平坦面片側のみ研磨あり
27	玉未成品	L07･M07	滑石	16.22	16.20	3.08	121-006-17	両面	荒研磨・穿孔段階の未成品。外面全体粗い線状痕もつ研磨面、１面に基準線。両面穿孔、回転傷・段顕著。SD009溝混入
28	垂玉	表採	滑石	21.14	17.18	4.77	113-表彩-4	両面	全面・孔研磨加工。やや粗い線状痕残す。やや透明感もつ石材
29	垂玉	N10-85	滑石	20.39	9.04	1.29	N10-85-337	両面	加工後一部欠損、欠損後摩滅。孔大き目。褐色み帯びた石材
30	大珠	SI007	不明	50.40	28.00	29.40	113-065-5	あり	中期の緒締型類似。縦横に穿孔。被熱・チョーク化し表面粉状。
31	軽石垂飾	SK008	軽石	124.50	60.50	32.50	099-017-30	あり	玉斧状
32	石製円板	N10-43	砂岩	40.10	37.60	34.40	N10-43-79	－	側面叩きor研磨で円形。両面中央にわずかな叩き痕？

※表２は六通貝塚の報告書（西野2007）に添付されているCD-ROM所収の付表を一部改変して提示した。